

日蓮大聖人御書全集

ひとえしろう

単衣抄

新版
1848
ゝ
1849

ひとえしやう

単衣抄

けんじ がんねん

建治元年（75）

がつ

8月

さい

54歳

なんじやうどの

えんじや

南条殿の縁者

ひとえいちりやう

おく

た

そうら

お

単衣一領、送り給ひ候い畢わんぬ。

きろうこく

ろうしや

捨

にほんこく

いま

ほけきやう

ぎやうじや

棄老国には老者をすて、日本国には、今、法華經の行者

捨

くに

かいびやく

てんじんしちだい

ちじんごだい

をすつ。そもそもこの国、開闢より天神七代・地神五代・

にんのうひやくだい

じんむ

いごくじゆうだい

きんめい

ぶつぽうはじ

人王百代あり。神武より已後九十代、欽明より仏法始まつ

ろくじゆうだいしちひやくよねん

およ

なか

ふぼ

ころ

もの

て六十代七百余年に及べり。その中に、父母を殺す者、

ちやうてき

もの

さんぞく

かいぞく

かず

し

聞

朝敵となる者、山賊・海賊、数を知らざれども、いまだき

ほけきやう

ゆえ

にちれんほどひと

にく

もの

かず、法華經の故に日蓮程人に悪まれたる者はなし。ある

おう にく

たみ にく

そう にく

いは王に悪まれたれども民には悪まれず、あるいは僧は悪

ぞく 漏

なん にく

によ 漏

ぐち ひと にく

めば俗はもれ、男は悪めば女はもれ、あるいは愚癡の人は悪

ちじん

漏

おう

たみ なんによ

そうに

めば智人はもれたり。これは、王よりは民、男女よりは僧尼、

ぐにん

ちじんにく

あくにん

ぜんにんにく

ぜんだいみもん

み

愚人よりは智人悪む。悪人よりは善人悪む。前代未聞の身な

こうだい

あ

覚

ゆえ

しょうねんさんじゅうに

り。後代にも有るべしともおぼえず。故に、生年三十二よ

ことしごじゅうし

いた

にじゅうよねん

あいだ

てら

お

り今年五十四に至るまで二十余年の間、あるいは寺を追い

い

ところ

追

しんるい

わずら

出だされ、あるいは処をおわれ、あるいは親類を煩わさ

よう

遭

かつせん

れ、あるいは夜打ちにあい、あるいは合戦にあい、あるい

あつくかず

知

う

て

お

は悪口数をしらず。あるいは打たれ、あるいは手を負い、

あるいは弟子を殺され、あるいは頸くびを切られんとし、ある

いは流罪兩度に及べり。

にじゅうよねん

あいだ ひとときかたとき

こころやす

よりとも

しちねん

二十余年が間、一時片時も心安きことなし。頼朝の七年

かつせん

隙

よりよし

じゅうにねん

とうじよう

の合戦も、ひまやありけん。頼義が十二年の闘諍も、いか

過

ほけきよう

だいし

い

によらい

げん

でかこれにはすぐべき。法華經の第四に云わく「如来の現に

いま

おんしつおお

とううんぬん

だいご

い

いつさいせけん

在すすらなお怨嫉多し」等云々。第五に云わく「一切世間に

あだおお

しん がた

とううんぬん

てんだいだいし

おそ

怨多くして信じ難し」等云々。天台大師も、恐らくは、い

きようもん

読

たま

いつさいせけん

みなしんじゆ

ゆえ

まだこの經文をばよみ給わず。一切世間、皆信受せし故な

でんぎようだいし

およ

たも

めつど

のち

り。伝教大師も及び給うべからず。「いわんや滅度して後を

きようもん ふごう

ゆえ

にちれん

にほんこく

しゆつげん

や」の経文に符合せざるが故に。

日蓮、日本国に出現せ

によらい きんげん むな

たほう しようみよう

何

ずば、如来の金言も虚しくなり、多宝の証明もなにかせ

じつぼう しょうつ みこと もうご

ほとけ めつご

ん。十方の諸仏の御語も妄語となりなん。仏の滅後

にせんにひやくにじゅうよねん がつし かんど にほん いっさいせけん たおんなしん

二千二百二十余年、月氏・漢土・日本に「一切世間多怨難信

いっさいせけん あだおお

しん がた ひと

にちれん

（一切世間に怨多くして信じ難し）の人なし。日蓮なくば、

ぶつごすで た

仏語既に絶えなん。

み

そぶ

ゆき じき

いのち つ

かかる身なれば、蘇武がごとく雪を食として命を継ぎ、

りりよう

みの 着 よ 過

さんりん まじ

このみ

李陵がごとく蓑をきて世をすごす。山林に交わつて、果な

とき むな

りようさんにち す

しか かわやぶ

はだか

きは空しくして両三日を過ぐ。鹿の皮破れぬれば裸に

さん よつき およ

もの なん

あわ

して三・四月に及べり。かかる者をば、何としてか哀れと

思

げんざん

い

ひと

はだえ

かく

ころも

おく

おぼしけん、いまだ見参にも入らぬ人の、膚を隠す衣を送

た

そうろう

ぞん

そうら

かたびら

り給び候こそ、いかにとも存じがたく候え。この帷を

着

ぶつぜん

もう

ほけきよう

よ

たてまつ

そうら

おんきよう

きて仏前に詣でて法華經を読み奉り候いなば、御經の

もんじ

ろくまんくせんさんびやくはちじゅうしじ

いちいち

もんじ

みなこんじき

ほとけ

文字は六万九千三百八十四字、一々の文字は皆金色の仏な

ころも

ひと

ろくまんくせんさんびやくはちじゅうしぶつ

いちいち

着

り。衣は一つなれども、六万九千三百八十四仏に一々にき

たま

ころも

た

そうら

せまいらせ給えるなり。されば、この衣を給びて候えば、

ふさいににん

ほとけおんたず

ましま

わ

だんな

夫妻二人ともに、この仏御尋ね坐して、「我が檀那なり」

まも

たま

こんじよう

いの

たから

と守らせ給うらん。今生には、祈りとなり、財となり、

ごりんじゆう

とき

つき

ひ

みち

はし

御臨終の時は、月となり、日となり、道となり、橋となり、

ちち

はは

ぎゆうま

こし

しゃ

れんげ

父となり、母となり、牛馬となり、輿となり、車となり、蓮華

やま

ににん

りようぜんじようど

むか

と

たも

となり、山となり、二人を霊山浄土へ迎え取りまいらせ給

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

うべし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

けんじ がんねんき といはちがつ

にち

にちれん

かおう

建治元年乙亥八月 日

日蓮

花押

もん

とうしろうどののにようぼう

つね

寄

あ

ごらん

この文は、藤四郎殿女房と、常により合いて御覧ある

そろう

べく候。